

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和3年度学校評価結果

達成度(評価)	
A	: 十分達成できている
B	: おおむね達成できている
C	: やや不十分である
D	: 不十分である

学校名	小城市立 牛津中学校
1 前年度 評価結果の概要	教職員相互の連携やチームによる対応はできていた。特に家庭学習等の取り組みについては、全校で提出日を決めて、提出させることで徹底を図った。これを継続することで基礎的な知識の定着と家庭学習の習慣づけを行いたい。「支持的風土に根ざした望ましい学級集団づくり」については、92%の生徒が道徳等の授業を通して、「思いやり」や「感謝」について考えられたと答えた。全職員で計画的に、工夫して授業を行った成果がみられる。ただし、相手の気持ちを十分に考えずに発言する生徒への指導を今後、行っていきたい。
2 学校教育目標	豊かな人間性を培い、志を高く学び続ける生徒の育成 ～ 主体性を高めることを通して ～
3 本年度の重点目標	① 確かな学力の育成: 基礎的基本的な学習内容の定着と家庭学習の習慣化を図る ② 豊かな人間性の育成: 支持的風土をもつ集団づくりを推進し、感謝する心の育成を図る ③ 健やかな体の育成: 健康、安全に対する意識を高め、基礎的な体力の向上を図る

4 重点取組内容・成果指標 5 最終評価

(1) 共通評価項目				最終評価	
評価項目	重点取組		具体的取組	達成度(評価)	実施結果
	取組内容	成果指標(数値目標)			
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師80%以上	・教職員間でマイプランを共有するとともに、校内研修で授業参観を全員が行い、成果指標の達成を目指す。	A	・全職員による相互参観授業の実践により、一貫性のある指導につなげることができた。 ・タブレットPCを積極的に活用することができた。それにより、生徒が意欲的に学習する場面が増えた。
	○学習内容の定着に向けて、分かりやすい授業の実践	○「授業が分かる」と答える生徒が85%以上	・授業づくりのステップ1・2・3を用いた牛津中授業スタイルの確立を図る。 ・「まとめ」「振り返り」の定着を図り、「振り返りシート」を工夫する。	A	・92.8%の生徒が「分かりやすい授業」と答えた。 ・学習状況調査では、対県比で無解答率が下がり、正答率が上がった教科が多くあった。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○生徒一人一人が安心して生活できる学級集団づくりを推進し、QU実施の2回目は各学級の学級生活満足率の割合を5ポイント以上増やす。	・年2回のQU実施とその検証に基づいた安心して生活できる学級集団づくりを目指す。	A	・学校評価アンケートでは、約90%の生徒が望ましい学年・学級集団づくりをされていると答え、保護者も約83%が同じ回答だった。 ・2回目のQUアンケートの結果では、学級生活の満足度が減少した学級もみられた。
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○生徒のつぶやき等、生徒の変容を常に観察し、定期的な調査等(月に1回)を実施する。	・生徒指導部会や生徒支援部会の運営を充実させることで情報を共有し、職員研修等で職員のスキルアップを図り、いじめの未然防止に努める。	A	・9割の生徒が「SNSのトラブル予防に努めている」と回答。8割の生徒と保護者が「学校は早期発見、早期対応に努めている」と回答。 ・3学期より生徒によるアンケートを県様式にそって改正した。
	○支持的風土に根ざした望ましい学級集団づくりの推進	○アンケートで、「思いやり」「感謝」の心をもつ割合が80%以上、「自己肯定感が高い」生徒の割合を75%以上	・全職員で道徳の授業を行い、人間性を培い、支持的風土を醸成し、認め合い支えあふ集団づくりの推進を行う。	A	・95%の生徒が「道徳の授業や学級活動などを通して『思いやり』『感謝』について考える機会が増えた」と回答した。 ・95%の職員が「道徳の授業やあらゆる場面で生徒の自己肯定感の育成を図ることができた」と回答し、自己肯定感を高める取り組みを行うことができた。
●健康・体づくり	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●「健康に食事は大切である」と考える生徒95%以上	・学校給食を「食育」の中心に据え、健やかな命を育むための食に対する知識の習得と意識の向上を図る。	A	・「健康に食事は大切である」と考える生徒は100%近くまで上った。また、毎日きちんと朝食をとって登校してきている生徒が93%以上に上がり、食事が健康に大切であるという知識の習慣と意識の向上を図ることができた。
	○健康、安全、命の教育に対する意識の向上	○「命の教育」に関する講演会を各学年1回ずつ実施し、自他の生命を尊重する態度を育てる。	○「命の教育」を実施し、自他の生命を尊重する態度を育てる。	A	・「命の教育」を各学年1回または2回実施し、9割の生徒が「自他の命を尊重する態度が育った」と回答。講演会後の感想を比べると自他を大切に内容の感想が多かった。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在職等時間の上限を遵守する。	・部活動の活動時間や活動内容の適正化を図るとともに、定時退勤推進日の設定など、時間外自発勤務の削減を図る。	A	・部活動休養日の実施については、ほぼ100%実施できている。定時退勤日については続けて呼びかけを行い、職員の80%は時間外勤務の削減を意識した働き方を実践することができた。
	○チームを意識した効率的な業務の推進	○効率的な業務への取組を推進するとともに、教職員の時間外勤務について1か月当たり、前年度比10%削減する。	・チームによる組織的な対応を進めることで負担軽減を図るとともに、風通しのよい職場環境づくりを進める。	A	・職員の85%が業務の効率化を図るために、組織的・計画的な対応を進めることができた。 ・時間外勤務については、前年比10%を超える削減となった。

(2) 本年度重点的に取り組む独自評価項目

評価項目	重点取組		具体的取組	最終評価	
	重点取組内容	成果指標(数値目標)		達成度(評価)	実施結果
○小中連携	○小中連携による学力向上の取り組み	○小中による授業参観を学期に1回行う。	・小中による授業参観後、情報交換会を行い、課題、今後の取り組みについて共有する。	A	・3学期はコロナウイルス感染症対策のため実施していないが、1、2学期は小中お互いに出向いて授業参観および研究会への参加をすることができた。参観以外でも、タブレットの利用方法などの情報交換を行い、効果的な小中連携を行うことができた。
○特別支援教育の充実	○個別の支援計画等により、職員の共通理解を図る	○教職員の共通理解・共通実践により支援を要する生徒の進路希望に添えるように努める。	・支援を要する生徒を含めた対応・支援体制の組織化を図るため、コーディネーターを中心にSC、SSW等との連携を図る。 ・巡回相談及び専門家派遣を定期的に行い、保護者との連携を図るとともに専門家からの助言を支援に生かす。	A	・研修会5回実施。 ・ケース会議は基本的には学年ごとに、生徒一人に対し複数回実施。 ・コーディネーターやSC、SSW等との連携で細やかな支援体制をとることができた。 ・特別支援教育の校内研修への講師招聘など、専門家の助言を受ける機会を設けた。 ・主としてSCのアドバイスを受けて、保護者との連携を図った。

●...県共通 ○...学校独自 ◎...志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	「確かな学力の育成」については、全職員による相互参観授業や効果的にICTを活用することで、授業の質が向上し、生徒が意欲的に授業に臨む姿が見られた。家庭学習等の取り組みについては、工夫・改善を行い、基礎的な知識の定着と家庭学習の習慣づけを行いたい。「豊かな人間性の育成」については、約9割の生徒が望ましい学年・学級集団づくりをされていると答えたことから、学級活動や道徳等の授業、行事等を通して、「思いやり」や「感謝」について考えることができた。「健やかな体の育成」については、9割以上が「健康教育」を通じて、自他の命を尊重する態度が育ったと思う生徒や健康に食事は大切であると生徒が答えたことから、健康や安全に対する意識を高めることができたと考えられる。
----------------	---